



Title	あとがき
Author(s)	青柳, 謙二
Citation	独語独文学科研究年報, 11, 153-153
Issue Date	1985-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25700
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_P153.pdf



あ　と　が　き

新築後間もない、けれども処々に学園紛争の傷跡の残る北大文学部の研究室に、京大から塩谷饒先生をお迎えしたのは、昭和45年4月のことだった。前年5月に独語学講座が、国立大学でも数少ない博士講座として開設されたのに伴い、小栗先生がそれにふさわしい独語学者をというお考えから懇望された人事だと聞いている。旧予科の古い建物から新装成った研究室へ、一講座の独文科から二講座の独語独文学専攻課程へと、この時期は創立後20年を経た北大のゲルマニスティクが大きく飛躍しようとした時期だったといえる。その後間もなく小栗先生が思いがけず東北大学へ転出されることになり、それからの独語独文科の歴史は、主任教授としての塩谷先生を中心に発展してきた。さらに昭和49年に北海道の独語独文学関係者の統一組織として北海道ドイツ文学会が設立されてからは、塩谷先生はほぼ一貫して会長を勤められてきた。その間文学部長、続いて図書館長と激職を歴任されながら、学会では自ら研究発表をされたり、G・カイザー教授を招いてセミナーを開催されたり、北海道のゲルマニスティクの発展につくされた。こうしたことが学生に与えた刺激も少なくなかったと思われる。

講義演習を通しての直接のご指導については今さら言うまでもない。語学文学と両講座が存在することが、それぞれの専門を越えて学生に及ぼした好影響は無視できないものがあるが、実は塩谷先生ご自身が、ドイツ文学にも深い造詣をおもちだということが、その影響を更に大きなものにしていて、私には思われる。たとえば私たちやドイツ人との会話の中で時としてすらすらと口について出るゲーテやロマン派の詩人の詩の一節にも、ご造詣の一端はうかがわれるが、学部長時代紛争のあおりで自宅にこもられた時には、トーマス・マンの長篇を読破されたという。先生の多才ぶりはそれだけではない。玄人はだしのギターの演奏、両手で同時に字を裏表上下左右とひっくり返して書く妙技など、コンパの席上私達もずい分楽しませて下さったものである。専門のご研究はこうした多方面の才能や知識を糧にして築かれたものに違いない。

その専門のご研究について述べることは、別に語学論集が刊行される予定とのことなのでそちらに譲るとして、ここでは北大およびわが独文研究室とのかかわりを中心にして、先生のご業績の一端に触れさせて頂いた。この記念論集は、先生のご指導に報いようという学生達の自発的な熱意によって編まれた。その熱意が十分な実を結んでいるかどうか。少なくとも将来を期待させるものがあるように思われる。幸い先生はご退官後も暫くは札幌にお住いと伺っている。今後とも変らぬご教導をお願いし、併せて一層のご健勝をお祈りすること切なるものがある。

昭和59年8月

青柳謙二（文学部教授）